

## やぎの冒険

先日、14歳の中学生、仲村颯悟君が監督した映画「やぎの冒険」を観ました。札幌市内のシアター・キノで上映されていましたが、上映期間が短かったこともあり、ご覧になった方は少ないものと思いますので、簡単にあらすじを紹介します。

主人公は、沖縄県那覇市に住む小学6年生の裕人です。彼は、冬休みを沖縄県北部の今帰仁村にある母の実家で過ごしています。赤瓦のウチナー家に住むのは、やさしいオバアとオジイ、粗野な裕志おじさん、同い年のいとこ琉也、そして「ポチ」と「シロ」という2匹の子やぎです。

裕人は、ヤンバル育ちの少年たちと自然の中で楽しい時を過ごしていますが、ある日、2匹の子やぎのうち「ポチ」がいなくなっているのに気づきます。そして、裕人が目にしたのは、「ポチ」が地元の人たちにつぶされ、祝いの席で「やぎ汁」となって振舞われている様子でした。このことにショックを受けた裕人は、食べるものがのどを通らなくなります。いとこの琉也は、裕人に対して「やぎは食べるものだ。だから大切に育ててきたんだ。それがダメなら、ステーキも何も食べるな。」と怒ります。

そんな裕人を気にする様子もなく、裕志おじさんは、家の新築祝いのためにやぎを買いにきた若夫婦に「シロ」を売ろうとします。「シロ」が売られ、トラックに載せられて運ばれようとした時、車が交通事故を起こし、そのハプニングで「シロ」が逃げ出します。そこから、裕志おじさんを先頭にドタバタの追いかっけが始まります。裕人もいとこの琉也と一緒に「シロ」を追いかけて、やがて二人は森の中に入り込み、一晚を野宿して明かすこととなります。夜が更けると、野犬の遠吠えが二人を襲い、恐怖にかられた二人は精一杯の大声を上げて野犬を威嚇します。

翌朝、「シロ」を発見した裕人は「シロ」を抱きながら家路に向かうのですが、その時刻、新築祝いの会場では別のやぎがつぶされ「やぎ汁」が振舞われており、その二つのシーンが重なり合うようにしてこの映画は終わります。

「人間が生きていくためには、他の生き物の命を奪わなければならない。」

ということは、誰でも頭の中では分かっていることです。しかし、日々の生活の中では、他の生き物を自分の手で殺すという場面は、ほとんどありません。

「命を大切に」という言葉が余力を持たないのは、命を奪うこと、命が失われることへのリアリティが希薄なせいではないかと感じています。私は、牛や豚を殺して解体したことはおろか、屠殺場を見たこともありません。それでも、子どもの頃、鶏をつぶす場面は何度も見ましたし、首をはねられた鶏が走り回るのを見て逃げ出したこともあります。このように、昔は、人間が他の生き物の命を奪いながら生きていることを、いやが上にも知る機会が随所にあったように思います。勿論、今でも、畜産農家の子ども達なら、どんなに可愛がっていても時期が来れば売りに出さねばならないし、売られた牛や豚は、その後どうなるか、また、そうしなければ自分達は生きていけないことも、良く理解していると思います。

しかし、殆どの人達、取分け都会に住んでいると、魚でも肉でも、食品として処理されたものを店で買えますので、その食品を通して「他の生き物の命」を実感することは、ほとんどないのではないかと思います。

映画の主人公も都会育ちで、動物は可愛がるもので、食べる対象とは思ってもよらないことでした。日々食事をしていても、沢山の生き物達の命と繋げて考えることはなかったに違いありません。

14歳の少年は、そのことを赤瓦のウチナー家に来て思い知らされます。「やぎは食べるもの。だから大切に育ててきた」といういとこの琉也の言葉に反論することもできず、むしろ、自分自身が、意識せずに肉や魚を食べてきた、その惨酷さに気付かされることになります。

また、真っ暗な森の中で、彼は、野犬の声に怯えながら、野犬もまた他の生き物の命を奪うことでしか生き延びることができない、そうした命と命の関係を知ったに違いありません。

「シロ」はひょんなことから逃げ出しますが、翌朝裕人に捕まり、その短い冒険は終わります。

翌日、やぎを抱いて赤瓦のウチナー家への道を歩く14歳の少年の姿が映し出されますが、彼は、どのような思いで「シロ」を抱き抱えているのでしょうか。彼の表情からは心の内を窺い知れませんが、いずれつぶされることを知りながら「シロ」を連れ帰ろうとする姿に、裕人もまた、たった一晩の間に大きく成長したことを感じさせます。(塾頭 吉田 洋一)